

青年期の精神的自立と母親への依存性の関連

中野 聡美

(青山学院大学大学院 教育人間科学研究科 心理学専攻)

The Relationship between Psychological Independence in Adolescence and Dependence on Mothers

Satomi Nakano

Department of Psychology, Graduate School of Education and Human Sciences, Aoyama Gakuin University

This study conducted a survey on 331 graduate and undergraduate students to examine the association between psychological independence of adolescents which are acquired and their dependence on mothers. Three kinds of questionnaire, “psychological *jiritsu* scale”, “dependence on mother scale” and “autonomous dependency style scale” were given to them. The result show that adolescents who were able to make decisions had lower need for dependence on their mothers, and who have warm human relationships with others were less likely to reject dependence on mothers. In addition, to maintain autonomy in a situation of dependence on mothers was suggested to have a significant association with the actual psychological independence acquired.

キーワード：青年期，精神的自立，母親への依存性

Keywords : adolescence, psychological independence, dependence on mother

I 問題と目的

1. 青年期の精神的自立について

青年期は子どもからおとなへの過渡期であり、青年にとって精神的自立は重要なテーマである。国内の精神的自立に関する研究はこれまでに数多くの知見が集積されており、それらは精神的自立を養育者との関係のなかに位置付けて発達の視点から検討する立場と、主体的な意思決定や自律的な行動に基づく心理社会的視点から検討する立場の二つに大別できる。高坂・戸田（2003）は、これまでの国内の研究を概観したうえで、精神的自立を「成人期において適応するために必要な心理・社会的な能力を備えた状態」と定義づけている。

先行研究は、精神的自立を多次元構造としてとらえ、青年自身に自己評価を求める量的な研究がほとんどである。一方で、稲吉（2017）は、大学生がどのように精神的自立の過程を実感するかに

関してインタビューを用いて質的に検討し、精神的自立のプロセスのモデル化を試みている。しかし、青年の精神的自立の検討は、主観的な報告に依るもののみで十分なのだろうか。精神的自立の達成に関する先行研究は蓄積されているが、その前提となる精神的自立概念そのものについて、青年の主観的評価のみに依らないよう、他の多様な要因との関連を実証的に検討する必要があるだろう。その要因の一つとして依存性があげられる。従来の研究では、精神的自立を含む自立は依存性の変容を通して獲得されるものであると考えられてきた。人間の最早期の依存対象は主に養育者である母親だが、やがて成長とともに依存対象の範囲が拡大し、依存の仕方も直接的なあり方から間接的なものに変容する（江口、1966）。つまり、青年期の依存対象は主に恋人や友人などの重要他者であり、自立は依存対象が脱中心化していく過

程（江口，1966）と考えられてきたため，母親への依存性を直接的にとらえる研究はあまりみられない。しかし，加藤・高木（1980）が指摘するように，実際は養育者に依存する部分が多いにも関わらず，首都圏においては，すでに中学生の段階で独立性がかなり高いことが明らかとなっている。このことは，社会的・文化的な影響を受けて精神的自立が高まることと，実態として精神的自立がなされていることとの峻別が難しいことを示しており，個人のなかでは両者を混同して評定していると思われる。青年は，職業生活や結婚などに意識を向けるのにもない，精神的自立が高まるのが推測される。しかし，実際に精神的自立がなされているか否かを確認することは先述のとおりに難しい。したがって，精神的自立の高まりと，実際に獲得された精神的自立を区別して後者をとらえるために，他者との関係に表れる精神的自立のあり方を検討する必要があると思われる。そのために，依存対象を母親として検討を行う。精神的自立の獲得とは依存性の変容と表裏一体をなすものであり，母親との関係に表れる依存性をとらえることで，青年が実際に獲得する精神的自立を確認できると考える。

2. 青年の依存性について

青年の依存性については，久米（2001）が作成した依存性尺度の下位因子のうち依存拒否と依存欲求に着目する。依存拒否と依存欲求は，青年の依存性の不適応的な側面を示している。依存拒否とは，潜在的に依存不安があり，他者への依存を拒むあり方である。依存欲求とは他者からの直接的な顧慮や反応を常に求める未分化なあり方である。一方で，依存拒否の高さは精神的自立の獲得を妨げない（高坂・戸田，2006）と示唆する先行研究もあり，依存対象を母親とする場合には依存拒否が精神的自立の獲得に寄与する可能性が考えられる。また，依存欲求の高さは，独立意識の高まる青年期にあっても必要な時は母親に頼りたいという願望を意味する。依存欲求を自己の安定性との関連から検討した久米（2001）

は，青年が自身の依存欲求を自覚していることの肯定的な意味を指摘しており，精神的自立の達成との関連を検討することは意義がある。以上を踏まえると，依存拒否および依存欲求が中程度の高さであることは，いずれも精神的自立の獲得に肯定的にはたらくと推測できるのではないだろうか。

さらに上記2つの依存概念に加えて，依存状況での自律性（竹澤，2008）に着目する。先述の依存拒否と依存欲求は，青年の依存性の不適応的な側面をとらえるものである。これに対し，依存状況での自律性は，あらかじめ母親への依存が想定された状況での自律的な行動や態度を尋ねるもので，依存性の適応的な側面を問うものである。依存状況でも自己を統制して自律的に振る舞えることは，最終的な自己決定を母親に頼らないという意味で成熟したあり方である。したがって，依存状況での自律性の高さは精神的自立がなされていることを裏付けられると考えられ，妥当性を確かめる観点からも検討する意義がある。

以上の議論をふまえ，本研究は青年期にあたる大学生の精神的自立について，母親への依存性に関する観点から検討し，青年の精神的自立の理解を深めることを目的とする。仮説は次のとおりである。依存拒否が中程度の高さの人は，精神的自立の程度が高い（仮説1）。依存拒否が中程度の高さの人は，精神的自立の程度が高い（仮説2）。依存状況での自律性が高い人は，精神的自立の程度が高い（仮説3）。

Ⅱ 方法

1. 調査対象者

青山学院大学の大学生および大学院生352名から回答を得た。有効回答者は331名（男性158名，女性169名，回答しない4名）であった。平均年齢は19.96歳（SD=1.47，range=18歳～27歳），有効回答率は94.0%だった。母親との同居状況は，同居（男性114名，女性129名，回答しない3名），非同居（男性43名，女性40名，回答しない1名），どちらでもない（男性1名）であった¹。

¹精神的自立と母親への依存性との関連についての検討に先立ち，母親との同居・非同居の別による精神的自立への影響を検討した結果，「価値判断・実行（同＜非； $t(167)=3.07, p=.002$ ）」「現状把握・将来志向（同＜非； $t(167)=1.98, p=.049$ ）」で女性に差がみられたのみであった。このため，本研究の分析ではこの属性は考慮に入れないこととする。

2. 調査時期と手続き

調査は2023年10月に実施した。質問紙は講義後または大学構内にて配布した。口頭にて倫理的配慮についての説明したあと、その場での回答を求め、即時回収した。

3. 質問紙の構成

- 1) フェイスシート項目:「性別(男性, 女性, 回答しない)」、「年齢(歳)」、「母親との同居(している, していない, どちらでもない)」への記入を求めた。
- 2) 母親への依存性を測る尺度:依存性尺度(久米, 2001)の質問項目を, 依存対象が母親に限定されるよう筆者が改めて作成した。このうち「依存欲求」「依存拒否」の2つの下位尺度(21項目)を用いた。母親が依存対象であることを適切に反映した内容するため, 1項目で「仕事」を「こと」に変更した。2項目で元の文意に影響のないよう自然な文章に変更した。「病気のときや, 憂鬱なときには, 母親に同情してもらいたい」を削除した。回答は協力者に当てはまるかどうかを「とてもそう思う(7点)」から「全くそう思わない(1点)」の7件法で評定するように求めた。以下, 「拒否」「欲求」と示す。
- 3) 母親への依存状況における自律性を測る尺度: 依存状況における自律性尺度(竹澤, 2008)の質問項目を, 依存対象が母親に限定されるよう筆者が改めて作成した。依存状況においても自分なりの意見・考えを持つことができることを表す4項目, 最終的に自分で意思決定できることを表す3項目, その決定に責任を持つことができることを表す4項目, 主体性を保持することができることを表す4項目の計15項目で構成された。竹澤(2008)の尺度は6件法だが, 選択肢を増やすために, 「とてもそう思

う(7点)」から「全くそう思わない(1点)」の7件法に改め, 評定するように求めた。以下, 「自律」と示す。

- 4) 精神的自立を測る尺度: 心理的自立尺度(高坂・戸田, 2006)の「価値判断・実行」「自己統制・客観視」「現状把握・将来志向」「適切な対人関係」「社会的知識・視野」の5つの下位尺度(29項目)を用いた。回答は現在の協力者に当てはまるかどうかを, 「とてもそう思う(7点)」から「全くそう思わない(1点)」の7件法で評定するように求めた。以下, 「価値判断・実行」「自己統制・客観視」「現状把握・将来志向」「適切な対人関係」「社会的知識・視野」と示す。

4. 倫理的配慮

青山学院大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得たあと, 調査を実施した。調査票配布の際には, 研究の主旨, 個人情報の守秘, 研究協力に対する撤回の自由と, その場合にも不利益がないことを説明し, 研究協力の同意を得られた方に回答を求めた。

Ⅲ 結果

1. 母親への依存性を測る尺度の因子分析

依存性尺度21項目, 依存状況における自律性尺度15項目について, 加算平均を尺度得点とした。各因子に負荷の高い項目の内的一貫性を確認するため, 逆転項目への回答を意味の方向に合わせて加減し修正したうえで因子分析を行い, 2因子を抽出し36項目を採択した。各因子の α 係数は.85～.91, ω 係数は.85～.91で内的一貫性は比較的高かった。因子分析の結果と各因子の信頼性係数, 各項目の基本統計量を表1に示す。

2. 精神的自立を測る尺度の因子分析

心理的自立尺度29項目について, 加算平均を尺度得点とした。各因子に負荷の高い項目の内的一

表1 「依存性尺度」および「依存状況での自律性尺度」の
平均値(標準偏差)および α 係数・ ω 係数

	男性 (N=158)	女性 (N=169)	α	ω
	M (SD)	M (SD)		
拒否	3.19 (1.06)	2.75 (1.11)	.86	.86
欲求	3.22 (1.07)	4.22 (1.22)	.91	.91
自律	5.71 (0.72)	5.49 (0.74)	.85	.85

表2 「心理的自立尺度」の平均値（標準偏差）および α 係数・ ω 係数

	男性 (N=158)	女性 (N=169)	α	ω
	M (SD)	M (SD)		
価値判断・実行	5.19 (1.15)	4.88 (1.07)	.87	.87
自己統制・客観視	4.72 (1.12)	4.41 (1.13)	.85	.86
現状把握・将来志向	5.05 (1.10)	4.81 (1.03)	.76	.77
適切な対人関係	5.37 (0.93)	5.44 (0.90)	.79	.79
社会的知識・視野	4.55 (0.95)	4.13 (0.95)	.77	.76

貫性を確認するため、逆転項目への回答を意味の方向に合わせて加減し修正したうえで因子分析を行い、5因子を抽出し29項目を採択した。各因子の α 係数は.76～.87、 ω 係数は.76～.87だった。「現状把握・将来志向」「適切な対人関係」「社会的知識・視野」はやや低いといえるが、先行研究(高坂・戸田, 2006)で見出されている α 係数の値とほぼ同等である。そのため、利用に問題はないと判断した。因子分析の結果と各因子の信頼性係数、各項目の基本統計量を表2に示す。

3. 母親への依存性に関する性差の検討

先行研究(久米, 2001)では、男性と女性とでは依存のあり方に違いが見られた。このことから、母親への依存性に関する性差を検討する必要があるため、「依存性尺度」と「依存状況での自律性尺度」の下位尺度ごとにt検定を行った。その結果、男性と女性とで有意な差がみられた。「拒否」「自律」ともに男性の方が女性より有意に得点が高かった(「拒否」は、 $t(325) = 2.93, p < .001, d = 1.088$; 「自律」は、 $t(325) = 2.75, p = .006, d = .730$)。「欲求」は女性の方が男性より有意に得点が高かった

($t(325) = 7.91, p < .001, d = 1.150$)。したがって、以下の分析は男女別に行った。

4. 母親への依存性得点による群分け

「拒否」「欲求」「自律」の各下位尺度得点が中程度の高さである人を抽出するために、男女別の四分位偏差を基準に、それぞれ四分位範囲(interquartile range ; IQR)で4群に分けることにした。各下位尺度得点において、平均得点が第一四分位までの範囲に入る群をIQR1、第二四分位までの範囲に入る群をIQR2、第三四分位までの範囲に入る群をIQR3、第三四分位以上である群をIQR4とする。このとき、本研究は、IQR3群を得点全体からみて中程度の高さと定めることとした。依存性と精神的自立の関連を相対的に検討するために、群分けの基準値を男女含む全体の四分位偏差に設定する方法も考えられる。しかし、性差を考慮した群分けは平均得点にみられる差を適切に反映したものと考えられることから、関(1982)にならい、男女を別とするそれぞれの四分位偏差を群分けの基準値とすることが妥当であると考えた。各群の四分位偏差を表3に、「拒否」「欲求」「自

表3 「拒否」「欲求」「自律」の加算得点から算出された四分位偏差

	男性			女性		
	第一四分位	第二四分位	第三四分位	第一四分位	第二四分位	第三四分位
拒否	24	31	39	19	26	34
欲求	27	35	43.75	38	46	55
自律	78.25	87	94	77	83	89

表4 「拒否」「欲求」「自律」の四分位偏差に基づく群ごとの平均得点と標準偏差
(順に、IQR1・IQR2・IQR3・IQR4)

	男性 (N=158)				女性 (N=169)			
	IQR1	IQR2	IQR3	IQR4	IQR1	IQR2	IQR3	IQR4
拒否	1.79 (0.33) (N=34)	2.67 (0.20) (N=37)	4.23 (0.25) (N=44)	4.50 (0.62) (N=43)	1.45 (0.26) (N=37)	2.017 (0.20) (N=44)	2.97 (0.25) (N=43)	4.19 (0.82) (N=45)
欲求	1.83 (0.44) (N=39)	2.80 (0.21) (N=35)	3.55 (0.25) (N=44)	4.56 (0.54) (N=40)	2.61 (0.58) (N=42)	3.75 (0.23) (N=37)	4.57 (0.24) (N=42)	5.67 (0.52) (N=48)
自律	4.74 (0.37) (N=40)	5.51 (0.15) (N=38)	6.00 (0.14) (N=38)	6.56 (0.23) (N=42)	4.49 (0.52) (N=41)	5.33 (0.11) (N=41)	5.68 (0.12) (N=37)	6.30 (0.28) (N=50)

注) 表中の数字は、平均得点(標準偏差)

律」の各下位尺度得点について4つの群ごとの人数および平均得点、標準偏差を表4に示した。

5. 母親への依存性得点による精神的自立得点の関連

母親への依存性と性別による精神的自立の差異を検討するために、心理的自立尺度の下位得点ごとに、母親への依存「拒否」・「欲求」・「自律」（いずれも4水準：IQR1・IQR2・IQR3・IQR4）と性別（2水準：男性・女性）を独立変数、心理的自立尺度の5因子の各因子得点を従属変数とする協力者間2要因分散分析を行った。以下に、心理的自立尺度の下位尺度ごとに結果を示す。

「価値判断・実行」では、「欲求」の主効果が有意であり（ $F(3, 319) = 6.64, p < .001, \eta^2 = .06$ ）、IQR2・IQR3・IQR4よりもIQR1で有意に得点が高かった。したがって、母親への依存欲求の低い人は精神的自立の程度が高いことが推測された。また、「自律」の主効果が有意であり（ $F(3, 319) = 29.12, p < .001, \eta^2 = .22$ ）、IQR1・IQR2よりもIQR3・IQR4の得点有意に高かった。つまり、母親への依存状況で自律性が高い人は、「価値判断・実行」の程度も高いと示唆された。さらに、「拒否」「欲求」「自律」のいずれも性別の主効果が有意であり、男性の方が女性よりも得点が高かった（「拒否」は、 $F(1, 319) = 6.51, p = .011, \eta^2 = .02$ ；「欲求」は、 $F(1, 319) = 5.95, p = .015, \eta^2 = .02$ ；「自律」は、 $F(1, 319) = 5.15, p = .024, \eta^2 = .02$ ）。性別と「拒否」・「欲求」・「自律」との交互作用においてはいずれも有意な差はみられなかった。

「自己統制・客観視」では、「自律」の主効果が有意であり（ $F(3, 319) = 10.04, p < .001, \eta^2 = .09$ ）、IQR1よりもIQR3・IQR4、IQR2よりもIQR4でそれぞれ有意に得点が高かった。つまり、母親への依存状況で自律性が高い人は、「自己統制・客観視」の程度も高いと推測された。また、「拒否」「欲求」「自律」いずれも性別の主効果が有意であり、女性より男性で有意に得点が高かった（「拒否」は、 $F(1, 319) = 5.70, p = .018, \eta^2 = .02$ ；「欲求」は、 $F(1, 319) = 5.75, p = .017, \eta^2 = .02$ ；「自律」は、 $F(1, 319) = 5.37, p = .021, \eta^2 = .02$ ）。性別と「拒否」・「欲求」・「自律」との交互作用においてはいずれも有意な差はみられなかった。

「現状把握・将来志向」では、「欲求」においては有意水準10%であるが交互作用が認められ（ $F(1, 319) = 2.40, p = .068, \eta^2 = .02$ ）、多重比較（Bonferroni法）の結果、IQR1の男性がIQR1の女性よりも「現状把握・将来志向」得点が高かった。ここから、「現状把握・将来志向」の程度が低い人では、精神的自立の程度が性別によって異なることが示唆された。また、「自律」の主効果が有意であり（ $F(3, 319) = 13.53, p < .001, \eta^2 = .11$ ）、IQR1・IQR2・IQR3よりもIQR4で有意に得点が高かった。つまり、母親への依存状況で自律性が高い人は、「現状把握・将来志向」の程度も高いと推測された。さらに、「拒否」と「欲求」は性別の主効果が有意であり（「拒否」は、 $F(1, 319) = 4.49, p = .035, \eta^2 = .01$ ；「欲求」は、 $F(1, 319) = 4.17, p = .042, \eta^2 = .01$ ）、女性より男性で有意に得点が高かった。

「適切な対人関係」では、「拒否」の主効果が有意であり（ $F(3, 319) = 8.87, p < .001, \eta^2 = .08$ ）、IQR3・IQR4よりもIQR1で有意に得点が高かった。したがって、母親への依存拒否の程度が低い人は精神的自立の程度が高いことが示唆された。また、「自律」の主効果が有意であり（ $F(3, 319) = 5.76, p = .001, \eta^2 = .05$ ）、IQR1・IQR2よりもIQR4で有意に得点が高かった。つまり、母親への依存状況で自律性が高い人は、「適切な対人関係」の程度も高いと示唆された。「適切な対人関係」においてのみ、性別の主効果はみられなかった。また、性別と「拒否」・「欲求」・「自律」との交互作用においてはいずれも有意な差はみられなかった。

「社会的知識・視野」では、「自律」の主効果が有意であり（ $F(3, 319) = 2.82, p = .039, \eta^2 = .03$ ）、IQR1よりもIQR4で有意に得点が高かった。つまり、母親への依存状況で自律性が高い人は、「社会的知識・視野」の程度も高いと示唆された。性別と「拒否」・「欲求」・「自律」との交互作用においてはいずれも有意な差はみられなかった。また、「拒否」「欲求」「自律」でいずれも性別の主効果が有意であり（「拒否」は、 $F(1, 319) = 12.15, p = .001, \eta^2 = .04$ ；「欲求」は、 $F(1, 319) = 12.61, p < .001, \eta^2 = .04$ ；「自律」は、 $F(1,$

319) = 10.50, $p = .001$, $\eta p^2 = .03$), 女性より男性で有意に得点が高かった。

IV 考察

本研究の目的は実際に獲得された青年の精神的自立を母親への依存のあり方から実証的に検討することであった。そのため、母親への依存性について3つの尺度を用いて、それらと青年の精神的自立の程度との関連を調べた。仮説は、依存拒否が中程度の高さの人は、精神的自立の程度が高い(仮説1)。依存欲求が中程度の高さの人は、精神的自立の程度が高い(仮説2)。依存状況での自律性が高い人は、精神的自立の程度が高い(仮説3)というものであった。分析の結果、仮説1と仮説2は支持されなかったが、仮説3は仮説どおりの結果を得た。以下では、精神的自立の下位因子ごとに考察を述べる。

1. 母親への依存性と精神的自立の関連

1) 「価値判断・実行」

精神的自立の「価値判断・実行」とは、自分の価値観に基づいて判断し、行動できるようになることを表す下位因子である。このうち、母親に対する依存欲求の程度に差がみられた。仮説1では、依存欲求が中程度の高さであれば、価値判断における精神的自立の程度は高いと予測したが、実際には母親への依存欲求が低い人は、自ら考え判断し行動する程度が高いことが示唆された。効果量を鑑みるに中程度の差であった。依存欲求で用いた尺度の質問項目の内容は、母親へ依存したいか否かという願望を問うというよりも、具体的な場面ごとに、何らかの行動をするときや、決断するときに母親を頼りたいか否かを問うものであった。したがって、行動レベルでの母親に対する依存欲求が低いことは、裏を返すと精神的自立の行動レベルである「価値判断・実行」が高いことを意味するため、仮説1は支持されなかったと考えた。

また、「価値判断・実行」では性差がみられ、男性の方が女性よりも自身の価値観に基づいて判断し行動することが示唆された。これは、男性は行動的で頼れる存在であるべきだという依然として根強い社会的な価値観を取り入れたも

のだと推測される。

2) 「現状把握・将来志向」

精神的自立の「現状把握・将来志向」とは、現在の自分の状態を理解し、それをもとに将来を考え、努力できることを表す下位因子である。このうち、母親に対する依存欲求と性別に交互作用がみられた。効果量を鑑みるに小さな差であるが、母親への依存欲求が低い男性は、依存欲求が低い女性よりも、自分の現状を把握して将来に向けて努力ができることが示唆された。よって、仮説1は支持されなかった。わが国では男性が母親を過度に頼ることへの抵抗感がとりわけ強く、こうした価値観を内在化していると、男性は母親に対する依存欲求を認めがたいと思われる。このように依存欲求が低い男性は、社会のなかでの自身を内外から客観的にとらえようとしているため、将来の目標と自身の現状も明確に把握されやすいと推測される。一方、女性は恋人がいる場合は依存欲求が高まる(高橋, 1968)との先行研究があり、その場合に母親への依存性は相対的に低くなることが考えられる。女性は社会的に母親を頼ることが受け入れられているが、それでも母親への依存欲求が低い女性は、他方で恋人への依存欲求は高いと推測され、ゆえに独立した個人としての現状や将来は、具体的に見据えにくいと考えられる。

3) 「適切な対人関係」

精神的自立の「適切な対人関係」とは、周囲のひとと協調し、他者と適切に関わることができることを表す下位因子である。このうち、母親に対する依存拒否の程度に差がみられた。仮説2では、依存拒否が中程度の高さであれば、対人関係における精神的自立の程度は高いと予測したが、実際には母親への依存拒否が低い人は、周囲と友好関係を築くことができると示唆された。効果量を鑑みるに中程度の差であった。青年の依存拒否の低さは、独立意識の発達から必ずしも自立的とはいえない(高坂・戸田, 2006)とされる。しかし、母親への依存拒否が低いことは、言い換えると、適切に母親を頼れることを意味する。このことは母親に対しても、周囲の人へも、依存することへの不安があまり

なく、依存しても主体性が保たれるという意味で精神的自立に影響することが推測される。また、「適切な対人関係」では依存性ごとの性差がみられなかった。

2. 母親への依存状況における自律性と精神的自立の関連

精神的自立の5つの下位因子である「価値判断・実行」「自己統制・客観視」「現状把握・将来志向」「適切な対人関係」「社会的知識・視野」について、5つすべての下位因子について依存状況での自律の程度に差がみられた。効果量を鑑みるに、「価値判断・実行」と「現状把握・将来志向」の差は大きく、「自己統制・客観視」は中程度の差であり、「適切な対人関係」と「社会的知識・視野」は小さな差である。いずれの下位因子においても、依存状況での自律の程度が高い人の精神的自立は高いといえる。よって、依存状況での自律性が高い人は、精神的自立の程度が高いとする仮説3どおりの結果を得た。母親への依存状況には、相談場面や母親を頼る場面が想定されるが、こうした場面で最終的に自己決定できることは、母親との間に適切な境界があることを意味すると思われる。母親への依存状況にあっても、その状況で青年が自分の意思と母親のそれとを切り離せることが精神的自立に大きく関わることが示唆された。

V 総合考察

本研究の目的は、青年期にあたる大学生の精神的自立について、実際に獲得される精神的自立を、青年の主観的な評価のみに依らない方法により検討することであった。そこで、精神的自立の獲得の度合いを測る要因として依存性を用いることとした。その際、依存対象を母親とし、潜在的な依存不安により母親への依存に抵抗がある「依存拒否」、母親からの直接的な配慮を求める未分化なあり方である「依存欲求」、母親への依存状況での自律的な行動に関する「依存状況での自律性」からなる3つの依存性尺度を用いて、それらと青年の精神的自立の程度との関連を調べた。

そして、これらの母親への依存性が、青年の精神的自立にどのように関連するのかをみると、不適応的な側面を示す「依存拒否」および「依存欲

求」と、適応的な側面を示す「依存状況での自律性」とでは、青年期に実際に獲得される精神的自立をとらえるうえで、その関連の度合いに違いがみられた。

まず、依存性のうち「依存拒否」と「依存欲求」は、それぞれ低い方が精神的自立の程度が高かった。仮説1および仮説2では、母親への「依存拒否」と「依存欲求」はそれぞれ中程度の高さであることが、青年の実際に獲得された精神的自立の程度の高さと関連があると予測した。これは、青年の依存対象を母親とした場合に、母親にほどよく依存しないあり方が、母親からの分離・独立という意味で精神的自立の高さに関連すると考えたものであった。また一方で、母親にほどよく依存したい欲求を持ち、それを自覚できることはむしろ成熟したあり方ともいえ、精神的自立の高さに関連するだろうと思われた。しかし、実際の調査結果からは仮説は支持されず、「依存拒否」と「依存欲求」は、両方ともその程度の低さが精神的自立の程度の高さと関連することが示唆された。仮説が支持されなかった理由について考察すると、まず依存拒否については、現代青年は「母親に依存しない」ことは否定しやすい心情にあると考えた。例えば、青年の約7割が自身の将来に不安を抱いているとの調査がある（こども家庭庁, 2024）。このことは、国外では近隣諸国の戦争など世界情勢が険しさを増し、国内では経済が長期停滞する時代性を反映する心情と解釈される。つまり、こうした危機的な時代にあって不安を抱えて生きる青年が自立の途上でも母親を頼ることはむしろ自然だが、それはあくまで「依存しないことはない」という二重否定のかたちだと表されやすかったと考察した。したがって、ほどよい「依存拒否」ではなく、「依存拒否」の低さという結果になったと思われる。ところが、このことは「依存欲求」つまり母親に頼りたいか否かと問われると、調査結果ではその程度が低い方が精神的自立の高さと関連することが認められた。一つには、青年の精神的自立には母親への依存欲求だけでなく、恋人や友人などの重要他者の存在が大きく関係することが考えられ、その場合に母親への依存欲求が相対的に低くなったことが挙げられる。

次に、「依存状況での自律性」の高さは、精神的自立の下位因子5つすべてに対して関連がみられた。効果量を鑑みても、その差は中程度から大きいものであったため、「依存状況での自律性」の高さは実際に獲得される精神的自立に強く関連すると考えられた。よって、仮説3は予測したとおり、依存状況での自律性が高い人は、精神的自立の程度が高いとの結果を得た。

さらに、性差について、「適切な対人関係」を除く4つの下位因子について、精神的自立の程度が女性よりも男性の方が高いことが示された。ただし、この結果をもって男性が女性と比べて実際に精神的自立を獲得しているのとらえることには注意が必要であろう。例えば、福島（1992）は、精神的自立について、男女では重視する価値観に差異があることを示しており、それによると男性は行動面での独立を重視し、女性は生活身の独立を重視しているという。この知見が示すように、実際の精神的自立の程度とは関係なく、男性が価値を置いている価値観であることの結果として精神的自立の評価が高くなった可能性があるためである。本研究が調査対象とした青年は主として大学生であり、その多くが養育者からの経済的な支援を受け、生活身のサポートも受けていると思われる。それゆえ、女性の精神的自立は相対的に高くならなかったと推察した。また、調査対象者の同居・非同居の別について、男性と女性とでその割合がほぼ等しいことから、この違いによる影響は性差には反映されていないと思われる。以上のことから、本研究の結果にみられた性差による男性の精神的自立の高さは、本研究がとらえようと試みた実際に獲得された精神的自立ではなく、主観的な評価のうえでの精神的自立であると推察した。

母親への依存性との関連で、特に効果量において中程度から大きな差がみられた精神的自立の下位因子ごとに考察を述べる。まず、自分の価値観に基づいて判断し、行動することを示す「価値判断・実行」と、現在の自分の状態を理解し、それをもとに将来を見据えて努力できることを表す「現状把握・将来志向」は、母親への依存状況でも自律的にふるまうことができ、さらに常に母親

に依存しないあり方により、実際に達成された精神的自立だと確かめ得ることが示唆された。精神的自立の下位因子のなかでも「価値判断・実行」と「現状把握・将来志向」は、「自分のことは自分で判断する」、「将来のために努力することができる」など、青年が独立した個人として意思決定して行動する側面が強い項目である。母親への依存状況でも自律性を保持できることは、行動面で青年が自己を統制できることを意味する。母親の意見や基準にとらわれず自己決定し、なおかつ心配や配慮を求めないあり方が、実際に獲得される精神的自立であると推察される。

次に、周囲の人と協調しながら、他者と適切に関わることを示す「適切な対人関係」は、母親への依存拒否の程度が低いこと、換言すると、母親に「依存しないことはない」という消極的な依存のあり方ともいうべき状態であることが、実際に達成された精神的自立だと確かめ得ると示唆された。さらに、母親への依存状況でも自律的にふるまえることは、その効果量が「適切な対人関係」では小さかったことは注目に値する。「適切な対人関係」は、「周囲の人と協調することができる」、「他人の気持ちを思いやることができる」など、他者の内面に関心を向けて、相手の立場に立って行動できるか否かを問う項目である。青年は母親に依存するだけでなく、母親をサポートする立場にもなりうる。つまり、青年と母親は、依存し依存される関係性であるともいえる。それは、青年が消極的には依存しつつ、一方で依存状況においても適度に自律的である関係性と言い換えられる。したがって、母親にほどよく依存し、依存されるあり方に、実際に獲得される精神的自立が見出されることが示唆された。

最後に、実際に獲得された青年の精神的自立の高さには、「依存しないことはない」という二重否定に表される母親への消極的な依存性との関連がみられた。それと同時に、母親を頼らないあり方にも関連が示された。このことは一見すると矛盾する結果を示している点で、興味深いといえる。そのなかで一貫していたことは、母親への依存状況にあっても青年が自律性を保てることが、精神的自立の程度の高さには大きな要因となることで

あった。精神的自立を獲得した青年は、母親への依存状況にてさまざまな価値観や意見を母親と共有していても、最終的には自分の意思で物事を決断し、実行していくことができると推察される。しかしそこには、常に母親を頼ることは望まないが、頼らないということはないという現代青年の揺れうごく態度がうかがわれる。青年期には、母親が青年を頼るという方向性も十分に考えられ、そこには「頼り頼られる関係」が成立する。それは、道具的あるいは情緒的な依存性や、母親のサポートを意図的に受ける孝行としての依存性など、質的に異なる依存性が含まれると考えられる。青年の依存対象は母親から脱中心化して、他の対象へ分化すると考えられているが、本研究の結果が示すことは、青年にとって母親は依存対象であり続ける可能性であり、それは青年の母親に対する依存性への両価的な態度に示されているのではないだろうか。精神的自立の獲得が、依存性の変容と表裏一体をなすものであるとの意味は、母親への半永続的な依存性の質的な変容であると思われる。しかし、この点については推測の域を出ず、本研究では明らかになっていないことであり、引き続き検討する必要があるだろう。

今後の課題について、本研究は、首都圏の私立大学に通う大学生を対象とした調査に基づいているため、結果には対象者の偏りによる影響が生じている可能性がある。また、調査に用いた依存性尺度は、あくまで青年が意識的・自覚的にとらえた側面を測っていることを否定できない。母親への依存性を精査するために、調査協力者の意図に歪められにくく、無意識的な特徴を測定できる投影法などの手法を用いることも、精神的自立との関連を検討することうえで今後の課題である。

謝辞

本論文は、2023年度に青山学院大学大学院教育人間科学研究科に提出した修士論文の一部を大幅に加筆修正したものです。ご指導いただきました青山学院大学教育人間科学部心理学科教授 上田琢哉教授に感謝を申し上げます。また、調査にご協力いただきました方々に御礼申し上げます。

文献

- 江口 恵子 (1966). 依存性の研究. 教育心理学研究, 14, 45-58.
- 福島 朋子 (1992). 成人における自立観: 概念構造と性差・年齢差. 仙台白百合女子大学紀要, 1, 15-26.
- 高坂 康雅・戸田 弘二 (2003). 青年期における心理的自立 (I)——「心理的自立」概念の検討——. 北海道教育大学附属教育実践総合センター紀要, 4, 135-144.
- 稲吉 玲美 (2017). 大学生における心理的自立の主観的実感プロセス. 心理臨床学研究, 35, 199-205.
- 加藤 隆勝 & 高木 秀明 (1980). 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係. 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 子ども家庭庁 (2024). 我が国と諸外国のこどもと若者の意識に関する調査 (令和5年度). Retrieved from https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/d0d674d3-bf0a-4552-847c-e9af2c596d4e/3b48b9f7/20240620_policies_kodomo-research_02.pdf (2025年1月8日)
- 久米 禎子 (2001). 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係: 自己の安定性との関連から. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 488-499.
- 高橋 恵子 (1968). 依存性の発達の研究: I 大学生女子の依存性. 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 竹澤 みどり (2008). 自律的な依存の仕方が依存後の自己成長感に及ぼす影響について. 筑波大学心理学研究, 35, 65-72.